

日本人大学生の英作文にみるBE動詞の多用  
— 状況・存在中心の日本語発想との関連 —

内野泰子(早稲田大学)

I. はじめに

最近の英作文指導はパラグラフ・ライティングばかりである。文部省の新指導要領でも高校英語教育におけるライティング指導の目標は「自分の考えなどを的確に書く能力を一層のばすとともに、英語で表現しようとする積極的な態度を育てる」ことに置かれている。1995年度より高校に導入された選択科目「ライティング・コース」用の教科書の中にも、「自分の考え」を英語の典型的なパラグラフ構成に従って書くことを中心としたものが目立ちはじめた。(1)

Kaplanなどにより「日本人が書く英語の論理展開は英語の標準的な論理展開と大きく異なり英語原語話者にとっては分かりにくいものである」ことがこれまで度々指摘されてきたにもかかわらず、従来の日本の高校の英作文指導の中ではパラグラフ・ライティングが十分にとりあげられてこなかったことを考えると、英語のパラグラフ構成を理解し、これに従って英語で自己表現を行う機会を高校から与えて行こうという新たな試みは英語コミュニケーション能力育成のために大変好ましいものと思われる。

しかしながら、英語の標準的なパラグラフ構成や論の展開方法を理解し活用できるようになっても、日本人が書く英語にまつわる問題のすべてが解消される訳ではない。竹蓋氏(2)は日本人大学生が書いた英文日記を分析し、①スタイル的に教科書の英語に近い、②語彙が少ないので同じ語を何度も繰り返して使う、③口語体に近いスタイルの割には文字数が多く、長い単語を使う傾向がある、④口語体と文語体、Formalな文体とInformalな文体を交ぜて使う、⑤原語話者のそれとは非常にかけ離れた、それ自体独特の、日本人の英語と呼ばざるを得ない英文であることを指摘している。大学レベルの英作文授業において、学生が将来社会人として明快で説得力のある英語を書けるようになるための基盤を育成することを目指す場合には、パラグラフ・ライティングに加えて、上記①-⑤の問題点すべてに留意した指導が当然必要となるはずである。特に⑤の「日本人独特の英語」、その中でも「日本語発想をひきずって書かれた英語」は、英語コミュニケーション上の大きな障害となる危険性があるものと思われる。本稿では、状況・存在中心の発想をする日本語からの干渉が主因となって、日本人が書く英語にはBE動詞やこれに類する動詞が多いのではないかと仮定し、大学生の英作文実例をベースにこの点を分析したい。また、英語原語話者はBE動詞を多用した英語にどのような印象を持つ傾向があり、これがどのようなコミュニケーション上の障害をもたらす危険性があるのかについて、英語原語話者向けのライティング指導書をベースに考察したい。さらに、日本人学生に「BE動詞多用」の問題点を認識させるための教授法についても検討したい。

## II. 中間言語としての「日本人英語」--「BE動詞多用の仮説」

第2言語習得過程研究の分野では、ある時点における第2言語学習者の第2言語能力を「中間言語」(interlanguage)、すなわち第1言語(母語)と学習対象の第2言語の連続体の中間に位置するものとしてとらえることがしばしばある。(3) こうした中間言語は、当然のことながら誤り(エラー)や問題点を伴うが、それらは決して偶発的なものではなく学習者各人の言語習得状況を体系的に反映していると考えられる。こうした中間言語を生み出すファクターとしては、①第1言語からの転移(transfer)、②これまで受けてきた言語教育や訓練からの影響、③学習者本人の学習ストラテジー、④学習者本人のコミュニケーション・ストラテジー(例えば、よく分からない表現の使用は回避しようとするかリスクを犯しても使ってみようとするか)、⑤第1言語習得にも共通する普遍的な言語習得段階(例えば、付加疑問の習得は一般に第1言語、第2言語を問わず遅い)、⑥学習者の置かれている言語習得環境やモチベーションなどの社会的、心理的要因が指摘されている。

日本人が書く英語もこうした中間言語の一種とみなすことができるが、英語は外国語であり日常語ではない日本のようなEFL環境においては、上記の要因のうち①と②を最も重大なファクターと見なすことができよう。母国語からの転移は、第2言語の習得を促進する「正の転移」("positive transfer")と第2言語の習得を阻害する「負の転移」("negative transfer": 干渉とも呼ばれる)に類別される。また、転移の起こるレベルも音声レベル、語彙レベル、センテンス・レベル、パラグラフ・レベル、意味レベルと様々である。

日本人が書く英文のパラグラフ・レベルでの構成法がわかりにくいと指摘される原因もこうした母国語からのnegative transferとこれまで受けてきた日英両語教育といった2つのファクターから説明がつく。日本語の小論文の論理展開の規範は一応、「起承転結」とされているが、これを英語にそのまま持ち込んでしまうと、特に他の話題に転じる「転」の部分が文章全体のcoherenceを重視する英語原語話者にとってはわかりにくいことがHinds (4) などにより指摘されている。また、日本では、小学校から高校にいたるまでの国語教育で、論理展開を主眼とする小論文作成より感情表現中心の感想文作成が重視されており、英語教育でも従来は英語パラグラフの論理展開についての指導が十分に行われてこなかったので、日本語の感想文スタイルをそのまま英文のライティングにも持ち込んでしまう結果となった。

しかし、筆者が過去数年にわたり、大学生を対象にパラグラフ・ライティングの指導を行った結果、こうしたパラグラフ・レベルでの日本語からのnegative transferは比較的短期間の指導である程度まで解消可能なのではないかとの印象を持った。すなわち、小論文作成の訓練をあまり受けていない日本人学生の場合、日本語の「起承転結」パターンは頭の中にそれほど深く定着していないし、トピック・センテンスを中心に置き、情報をgeneralなものからspecificなものへと流す英語の典型的な「逆三角形」型のパラグラフ構成や、論の展開を明確にするつなぎの言葉などは論理的で理解しやすいものであるため、日本人学生は自分の考えをまとめるための便利な道具としてこれらをあまり抵抗なく受け入れ、スムーズに活用できるようになることが多いように思えた。この点については、英語のパラグラフ構成法を学ぶと、さらに進んで、これを日本語の小論文や作文にも活用する傾向が見られるとの天満氏による調査結果もある。(5)

これとは対照的に、実際に英作文指導を行う中で、最も成果をあげることが難しいのは、センテンス・レベルで英文に現れてくる日本語からのnegative transferの解消ではないかとの印象を持った。特に状況・存在を中心とする日本語発想になじんだ日本人にS/VあるいはS/V/O型を中心とする英語発想を定着させるのは非常に難しいように思われる。

対照言語学の分野でしばしば指摘されているように、英語ではものごとをActor(動作主:S)/Action(動作:V)と認識し、特に動作の「主体」と「客体」を対立的にとらえる発想が中心となっている。従って、特に、動作主+他動詞+目的語のS/V/O型の文が好まれる傾向にある。一方、日本語ではものごとを「状態、状況、存在」としてとらえる発想が中心であるために、奥津氏(6)や大津氏(7)が指摘するように「形容詞文」、「ダ型文(名詞+ダ、デス、デアルなど)」、「存在文(アル/イル)」や「なる」表現などが頻繁に使われる傾向にある。池上氏はこうした日英両語の発想の違いを、英語は「する型言語」であるのに対して日本語は「なる型言語」であると類別している。(8) また、安藤氏はこうした「する型」発想と「なる型」発想について下記のような例を示している。

(英)We are going to get married in June. / (日)私たち、6月に結婚することになりました。

(英)I'm moving out next month. / (日)来月、転居することになりました。(9)

また、國弘氏は日英両語を「人間中心言語と状況中心言語」とし、「英語では人間を中心にすえてその人間がなにか活動したり認識したりする形をとっているのに対し、日本語ではそのような人間は背景に後退しており、その場面の状況をとらえて表現する」と対比し、次のような対照例を示している。

(英)I've lost a button. / (日)ボタンがとれちゃった。

(英)We haven't even got running water. / (日)ここには水道さえないんです。

(英)We've come to a conclusion. / (日)やっと結論が出た。

(英)The workers at the factory have gone on strike again. / (日)またあの工場ではストライキが始まった。(10)

英語のS/V/O文の動作主はふつう人間であるが、池上氏(11)が「英語ではこの意味構造の文型があまりにも確立しているため、(人間以外)の項が(動作主の)占めるはずの位置にいれられた---(中略)---表現が広い範囲で使われる」と指摘しているように、日本語では違和感のある無生物主語の他動詞文も頻繁に用いられる。こうした日英両語の対照をSeidensticker/安西は、状況・状態中心の日本語から無生物主語他動詞文の英語に翻訳した下記のような例で説明している。

(日)(大蒜は)胃腸を強くするばかりでなく、エネルギーになるんだからやめられない。(谷崎潤一郎「蓼喰う虫」)

(英)Besides strengthening his stomach's defense,  
it gave him energy and he was quite unable to do without it. (12)

さらに、Hinds/西光は、日本語は“stative language”(静的言語)であるのに対し英語は“active language”(動的言語)であるとしたうえで、英語では存在を表すのにも、動的なS/have(あるいはget)/Oの表現が用いられることが多いため、英語は“possession focused

language”、日本語は”existence focused-language”とも説明できるとし、次のような対照例を示している。

(英)I have a fever. / (日)熱がある。  
(英)I have some money. / (日)お金がある。  
(英)He's got no education. / (日)(彼は)教養のない人だ。 (13)

前出の池上氏も日英両語の所有表現の相違について触れ、「<所有>の表現に関してBE系統の動詞を用いる言語とHAVE系統の動詞を用いる言語」(14) があるとし、日本語は”BE-language”であるのに対して英語は典型的なHAVE-languageであることを「(英)I have two children. / (日)私には子供がふたりいる」といった例をあげて説明している。

日本の従来の英語教育では、読解については理解確認のため「直訳」による訳読が中心を占め、英作文については既習文法事項確認のため文法的に正しいか否かを最も重要な判断基準とする「和文英訳」が中心となってきたため、日本人の英語学習者は日英両語の表現を上記のような発想面から比較対照して学んだ経験に乏しい。従って、英語原語話者の発想の基本がS/VあるいはS/V/O型であり、状況・存在中心の日本語発想とは大きく異なることを認識せずに英文を書いている日本人が多いのではないかと思われる。せっかく「パラグラフ・ライティング」指導を受けて、英語の標準的パラグラフ構成で自分の考えや情報をまとめることを学んでも、センテンス・レベルの発想面の違いを明確に認識するような英作文指導をあわせて受けられない限り、パラグラフを構成するセンテンスは状況・存在中心の日本語発想からのnegative transferをひきずったものとなり、英語原語話者に対して不自然、稚拙あるいは分かりにくいといった印象を与える英文の羅列になってしまうのではないだろうか。

本稿では、そうした前提に立ち、①日本人の書く英語には日本語の状況/存在型中心発想あるいは日本語の「形容詞文」や「ダ型文」、「存在文」からのnegative transferが主因で連結動詞BEを用いた英文が頻出するのではないか、②日本語の「なる」的発想から連想され生み出された”BECOME型動詞”を使ったS/V/C型の英文(become a teacher, come true, go wrong, get tiredなど)も頻出するのではないかという2つの仮説を立て、大学生の英作文実例を分析した。

### III. 大学生英作文についての”BE動詞/BECOME型動詞”分析

上記の仮説について分析するため、1995年度に担当した早稲田大学政経学部1年生1クラス41名のライティング実例を動詞中心に検討した。分析の対象としたのはこれらの学生が4月の第1回目の授業で書いた「東京と私」という題の「自由作文」である。作文の制限時間は20分間とした。英語のライティングの評価には、シンタックス面から、文構造の成熟度を示すT-unit(minimal terminable unit: ひとつの主節を含み、ひとつ以上の従属節や句があればそれをも含む言語単位)や、反対に文構造の未熟さを示すcoordination indexなどの指標が用いられることがある。また、語彙面から、総語数の中で異語がどの程度くりかえし使われるかを示すToken Type Ratioを測定し、評価する場合もある。分析対象の41例の多くはこれらのいずれの指標から見てもかなり問題があるものであった。

ただし、本稿では日本人学生のBE動詞ならびに”BECOME型動詞”の使い方と頻度が検討の対象であるため、総語数、動詞総数、BE動詞の数やBE動詞の使われ方、存在をあらわす”there

is”表現の登場頻度、文中に2回以上登場したBE動詞以外の動詞、BECOME型(become, get, come, go, grow, turn)を用いたS/V/C文の登場頻度、文中に登場した無生物主語他動詞文について主として分析し、下表のような結果を得た。なお、BE動詞、その他の動詞のいずれについても、本動詞のみならず、準動詞(不定詞、現在分詞、過去分詞)も1語として計上した。

被験者	総語数	動詞総数 (a)	be動詞 総数(b)	(b)/(a) (%)	受動態 のbe数	進行形の be数	There is構文数	その他の 主な動詞*	無生物 他動詞文数	become型 動詞文
#1	116	20	7	35	1	0	2	know/have	1	0
#2	92	20	6	30	0	0	0	say	0	0
#3	52	11	2	19	0	0	0	live/like	0	0
#4	56	11	5	45	0	0	3	live	0	0
#5	57	14	7	50	2	0	1		0	0
#6	26	2	2	100	0	0	0		0	0
#7	50	8	3	38	0	0	0	live	0	0
#8	82	12	9	75	0	0	0		1	0
#9	117	28	6	33	2	1	0	live/think/feel	0	0
#10	85	16	8	50	1	0	0		0	0
#11	46	9	2	22	0	0	0		0	0
#12	53	10	1	10	0	0	0	accept	1	0
#13	73	9	4	44	1	0	1		0	0
#14	90	14	7	50	0	0	0	live	0	0
#15	70	14	5	36	1	1	2	live	0	0
#16	110	20	8	40	1	0	2	use	0	0
#17	42	9	3	33	0	0	0	want/come	0	0
#18	43	7	3	43	0	0	0		0	0
#19	48	9	1	11	0	0	0		0	0
#20	80	11	2	18	0	0	1	live	0	0
#21	86	19	10	53	0	0	0	want	0	0
#22	91	15	8	53	0	0	1	live/have	1	0
#23	62	12	4	33	0	0	0	hope/like	1	0
#24	55	12	4	33	1	0	1		1	0
#25	37	7	2	29	0	0	0	live	0	0
#26	55	11	5	45	2	0	0		0	0
#27	71	11	4	36	1	0	1	live/like	0	0
#28	88	15	5	33	1	1	0	live	0	1
#29	52	11	5	45	0	0	0	live	0	1
#30	83	15	7	47	1	0	4	live/come	1	0
#31	66	14	4	29	1	0	0	live/think	0	0
#32	52	10	2	20	0	0	0		1	0
#33	76	13	4	31	1	1	0		0	0
#34	70	13	5	38	0	0	0		1	0
#35	45	4	10	25	0	0	0		0	0
#36	103	19	6	32	0	0	2	live/think	0	0
#37	83	22	9	41	1	0	0		0	0
#38	69	13	5	38	1	0	1	like	1	0
#39	48	8	5	63	2	0	1		0	0
#40	45	6	3	50	0	0	0		0	0
#41	57	13	7	54	2	0	1		0	0

(\*文中に2回以上登場したBE以外の動詞)

BE動詞の使用頻度についてみると、使用された動詞(BE動詞を含む)・準動詞の総数に対するBE動詞の平均比率は約4割であった。BE動詞が動詞総数の5割以上占めるものが11例あり、BE動詞以外の動詞は全く使われなかった極端な例も1つあった。なお、ここでは、準動詞も含めて分析したが、本動詞に限って分析すれば、BE動詞の比率はさらに高くなるものと思われる。また、BE動詞は、受動態ならびに進行形において助動詞的働きをするものとS/V/CのSとCを連結する連結動詞、すなわち、繫辞(copula)の働きをするものに類別できるが、上記の作文例中のBE動詞は後者の繫辞に属するものが圧倒的に多かった。また、「存在文」There is”構文も学生が好んで用いる表現のようで、15名の学生がこれを使用し、中には80語という短い作文中、4箇所もこの構文を用いた例もあった。

King (15) はBE動詞の使用頻度について、「任意の書物から8~9行の連続したセンテンスを選び、動詞の総数を数える。BE動詞がその3分の1を越えれば連結動詞や受動態が過度に

使用されていると考える」と指摘し、「BE動詞は動詞全体の3分の1から4分の1にとどめるのが望ましい」としている。ただし、Kingはこの比率を非常に大まかな基準としてあげているにすぎないものと思われる。BE動詞の登場頻度は熟達した原語話者が書いたものであっても実際にはジャンルや目的、スタイル、内容により大きな違いがある。従って、この基準がすべてのライティングに適用可能とは思われないが、一応の目安として見た場合、今回の被験者にみる「平均して動詞全体の40%近く」というBE動詞比率はこれを相当に上回るものであった。Lanham (16) は、Kingのような具体的なBE動詞比率は示していないが、BE動詞は“the weakest verb in the language”であるとし、最少限の使用にとどめるよう勧めている。実際に、熟達した英文で定評のあるU. S. News & World Report誌の1996年5月13日号に掲載された巻頭の短文記事16篇を調べてみると、総語数平均150語程度の各記事で、BE動詞は平均2、3語程度しか使われていない。

このように、今回の被験者の英文については、一般に英語原語話者のライティングで望ましいとされている使用頻度を越えてBE動詞が多用される傾向があることが見られ、仮説①が頻度面では検証された。ただし、こうしたBE動詞多用の原因は、仮説①に示したように状況・存在中心の日本語発想からのnegative transferと強く関連したものと推測されるものの、その他の原因も考えられるため、本分析では、日本語発想からのnegative transferがBE動詞多用の原因としてどの程度寄与しているのかを特定することはできなかった。例えば、今回の英作文の課題は“Tokyo and I”といった“descriptive”なものであったが、“argumentative,” “instructional”な作文ではBE動詞の頻度は低くなるかも知れない。また、日本人の場合は、英語を学習する時、まず最初にBE動詞を学ぶ場合が多いこともあって、BE動詞によくなじんでおり、これが使用頻度を高める原因の一つとなっているのかも知れない。

一方、“BECOME型の動詞”については、日本語の「なる」発想に近いにもかかわらず、わずかに2例(それもbecomeのみ)しか使用が認められず、前項での仮説②は否定された。綿貫/淀縄/Petersen (17) は英語の第2文型S/V/Cのうち、結果的状态に「なる型」のこうした表現のうち、“become”は理解しやすいが、“turn”など他の動詞になると生徒にとって難しくなるので、「BE動詞に変えてもいうことができる」と指導すると生徒に分かりやすいと説明している。つまり、“become”以外の“BECOME型動詞”は、本来、日本語の「なる」発想と結びつくはずのものではあるが、英語表現としては日本人の頭の中にBE動詞ほど定着していないため、作文で“productive”に使うまでには至っておらず、英語でのライティングとなると「なる的」な発想は、彼らにとってよりなじみのあるBE動詞に転化されてしまうのではないかと思われる。

今回のサンプルでは、「無生物主語他動詞文」は、“Tokyo has ~.”という表現のみを11名の学生が用いただけであった。また、動詞全般を見ると、作文で使用された語彙が極めて少ないことが認識された。今回分析の対象とした学生の場合、読んで分かる動詞のボキャブラリー(receptive vocabulary)はかなりあるはずだが、使える動詞(productive vocabulary)となるとlive, come, like, want, hope, thinkなど極めて限られている。日本人が英作文でBE動詞に過度に頼ってしまう一因は、こうした動詞のボキャブラリー不足にもあるのかも知れない。

なお、下記の3例は、総語数、BE動詞の使用頻度、“There is”表現の使用頻度、動詞のproductive vocabularyなどの面から見て今回のサンプル中、典型的なものである。

(実例1)

I was born in Tokyo and I live in Tokyo for 6 years. But Tokyo is dirty.

So I don't like Tokyo so much. Firstly, in Tokyo people is too many. Then, air is so bad. There is the parts I like too. Tokyo have many many record shop and music hall. I love music very much. So, about only this point I can say "I like Tokyo."

(実例2)

Tokyo is very attractive to me. In Tokyo, there are many things I am interested in. For example, famous clothes stores, wonderful theme parks, nice restaurants and so on. It's one of important reasons I enter this university, not Keio University. (Keio University is placed in Hiyoshi.)

(実例3)

I have lived in Kawasaki city. But my junior and senior high school was Waseda junior and senior high school. This school situates in Tokyo. For this reason, my distance from Tokyo is not distant. I like Tokyo. Especially Takadanobaba. It is my second hometown.

#### IV. BE動詞多用文の英語原語話者にとっての問題点とその解消方法

前出のKing (18) は、「助動詞ならびに連結詞としてのBE動詞は他の動詞とは別個の存在で、それだけでは何らの動作も表さない」としている。特に、連結動詞としてのBEについては、「文法的に完全な文をつくるために必要な中味のない言葉であり、過度の使用は文の意味を弱めるとともに、本来BE動詞の代わりに用いることができるはずの表現力の豊かな動詞を排除することになり、単調で締まりのない文章になってしまう」と警告を発している。なお、Kingは、前項で示したように、BE動詞が動詞全体の3分の1から4分の1を越える場合に過度の使用とみなしている。結局のところ、連結動詞BEによる表現はActor/Action中心の英語の基本的発想とは異なるため、英語の原語話者に訴える力が弱いということであろう。Kingは連結動詞のBEを減らして「文章をよくする」方法として次の3つをあげている。

①「S/BE/形容詞 and ---」の構文では、形容詞を直接主語につなぐことができる場合がある。

Ex. The text is relatively simple and is obviously written for the non expert. →The relatively simple text is obviously written for the non expert.

②「S/BE/名詞あるいは形容詞 and ---」の構文では、名詞あるいは形容詞を挿入部分にもっていくことができる場合がある。

Ex. Man is a part of nature and shares in the phenomena that apply to all other animals. →Man, (as) part of nature, shares in the phenomena that apply to all other animals.

③「S/BE/名詞」構文では、補語の名詞を動詞に変えることができる場合がある。

Ex. This small monograph is an excellent summary of current concepts of neurophysiology. →This small monograph excellently summarizes current concepts of neurophysiology.

一方、Lanham (19) は「あたりまえのことを書こうとしているのにBE動詞や前置詞句によってそれをもってまわった文章表現"extraordinary language"で書く人間が多い」と指摘し、そうした場合には、文の主体と客体("Who is kicking-who?")をはっきりさせ下記のように単純に書き直すべきであると提言している。

Physical satisfaction is the most obvious of the consequence of premarital sex. →People usually enjoy premarital sex.

Williams (20) もLanhamと同様に、動詞を"nominalize"して抽象名詞化し主語においた「S/BE/C」文は好ましくなく、「character」と"action"をはっきりさせて次のように書き直した

方が明快であるとしている。

Our intention is to audit the records of the program.

→We intend to audit the records of the program.

また、Kingが提案する①と②の方法に従うと、coordination indexも下がり、シンタックス面でも成熟度も高まることが分かる。安藤 (21) は「S is Cの意味関係は(a)特徴づけ(characterization), (b)同定(identification), (c)分類(classification)の3種である」としているが、結局この3つはBE動詞を使わなくとも他表現を用いて文中に埋め込むことが可能なものなのである。従って、Kingが①、②であげているようなこれらを埋め込んでいないBE動詞文はシンタックス面で未熟、稚拙あるいは冗長な印象を与えてしまう場合が多いと言えよう。

また、英語原語話者向けのライティング指導書では、今回の被験者の英作文にもしばしば登場した「There is」構文についても、「無用な表現で文頭のインパクトを損なう」(Fruehling/Oldham (22))、単に文を長引かせたり読者の理解を妨げるだけである場合には用いない方がよい |(Dernbach, et. al (23))、「there is などのようなおどろおどろきな表現の代わりに他動詞の能動態を用いた方がいきいきとした表現になる場合がある」(24)などの指摘があり、「There is」構文の過度の使用も悪文につながる危険性があることがうかがえる。なお、これらの書では次のような書き直し例が提言されている。

There was a large bush overhanging the intersection, and it was this obstruction that blocked the driver's view of oncoming traffic.

→A large bush overhanging the intersection blocked the driver's view of oncoming traffic. (25)

There were a great number of dead leaves lying on the ground.

→Dead leaves covered the ground. (26)

これらの指導書では、受動態の多用も悪文につながる要因として指摘されていることが多く、不要な受動態を能動態に転換すると文中からさらに多くのBE動詞(ただし、助動詞としてのBE)を消去することができる。しかし、King (27) は、「動詞の進行形は正確さと力強さを減じるより、むしろ加えるのが常である」として、進行形の助動詞としてのBEは減じる必要がないと述べている。

BE動詞を不適切あるいは過度に使用した文章について指摘されている問題点を以上みてきたが、これらをまとめると、英語原語話者にとっては、そうした文章は、①未熟な書き手であるという印象を読み手に与える、②冗長な印象を与え、書き手が言わんとするところが読み手にはっきりと伝わらない、あるいは、③かえって持ってまわった印象を読み手に与えるなどといったコミュニケーション上の障害をもたらす危険性があると言えよう。BE動詞を全く使わない英文「English Prime」をよしとする極論もある程である。

ただし、英文においても、動作ではなく、存在や状況を際立たせて表現するために、あるいは、文章の新・旧情報の流れや前文とのつながりなどから、S/V/O型の文よりBE動詞を使った方がより適切で明快な場合も当然ある。また、日本人の発想からはなかなか出てこない英語原語話者による多様なBE動詞表現やBE動詞を含む慣用表現も存在する。巻下は夏目漱石の「坊っちゃん」と「こころ」のいくつかの部分について日本人による英訳例と英語原語話者



による英訳例を比較し、こうした英語原語話者ならではのBE動詞の使い方を例示している。

- (1) 創痕(きずあと)は死ぬまで消えぬ。  
(日本人訳) I shall carry the scar to my grave.  
(英語原語話者訳) The scar will be with me for life.
- (2) 私は返事に窮しました。  
(日本人訳) I did not know what to say to her.  
(英語原語話者訳) I was at a loss for an answer. (28)

## V. 日本人学生への指導方法案

日本人の場合、「状況、状態、存在」を中心とした日本語発想が頭の中に深く定着しているため、BE動詞やthere is構文の多用が英語原語話者にとっては前項で述べたようなコミュニケーション上の障害にもつながりかねないものであるという問題点に気付いていない場合が多いようである。また、中学・高校の英作文や受験英語では文法的に正しいことが最重要視され、文のスタイルや発想法までは指導が及ばない場合も多い。従って、今回分析した作文サンプルの多くに見られたように、BE動詞を多用してもそれが文法的に正しければ問題ないと考えている学生が多いのではないと思われる。

学生にBE動詞の使用をめぐる問題を認識させるためには、まず各自に英語を書かせ「BE動詞使用法や使用頻度」について自ら考えるチャンスを与える必要がある。そして、実際に過度あるいは不適切なBE動詞の使用がみられるようなら、King等が提言している書き直し方法を指導し、自分が書いたBE動詞文をS/V/O構文を中心とするActor/Action型にリバイズさせ、その過程で日本語発想と英語発想の違いについて認識させるといったプロセスをとることができよう。こうした書き直しのプロセスを通じて、連結語としてのBE動詞を文から消去すると、シンタックスの成熟度が高まり、文が改善されることも認識させることができよう。

また、「ある/いる/だ/なる」型の日本語発想と「する」型の英語発想の違いがはっきりと浮き彫りになるような和文英訳を適宜導入して、日英両語の発想の相違への認識を高めさせることも可能であろう。その例としては、次のようなものが考えられる。

- (1) 我が家は5人家族です。  
(学生からはしばしば“My family are five.”といった誤答が出されるがこれは誤りであることを説明する。また、“There are five people in my family.”や“We are a family of five.”は正しい英文であるが、“My family consists of five.”や“My family has five members.”のような他の動詞を使った表現も可能であることを認識させる。)
- (2) 今朝、東京で強い地震がありました。  
(“There was a strong earthquake in Tokyo this morning.”は正解ではあるが、“A strong earthquake occurred in Tokyo this morning.”といった自動詞表現に加えて、“A strong earthquake hit Tokyo this morning.”や“Tokyo had a strong earthquake this morning.”などの他動詞表現も頻繁に使われることを認識させる。)
- (3) 東京タワーは私の家の近くにあります。  
(“There is Tokyo Tower near my house.”のようにthere is プラス 固有名詞で用いるのは誤りであることを説明する。また、BE動詞を用いた“Tokyo Tower is in my neighborhood.”は正解であるが、“Tokyo Tower rises in my neighborhood.”や“My neighborhood has Tokyo Tower.”も可能であることを認識させる。)
- (4) その道を歩いていくと、角に銀行があります。  
(“Walking down the street, there is a bank at the corner.”は文法的にも誤りであることを指摘し、英語では日本語にはない人間が前面に出て、“Walking down the street, you will find a bank at the corner.”となることを認識させる。)

学生はこうした書き直しや和文英訳を行うことにより日英両語の発想の違いについての認識を深めると、英語を読む時にも動詞の使い方に注目するようになり、動詞のproductive vocabularyも増えていくように思われる。そのためには、ライティングを補完するリーディング教材として、前述したUS News & World Reportの記事などのようにBE動詞の使用頻度が少ない熟達した英文を学生に与えることも重要であろう。

## VI. おわりに

最近ではEnglish as a World LanguageあるいはWorld Englishesといった考え方から、英語には1つのスタンダードなどはなく、英語を使う各地域の人々が自分の第1言語の特性や発想をひきずった英語を使用しても当然であるといった主張も見られる。コミュニケーションの相手が目の前に存在し、理解不足を何らかの形で補うことができる口頭コミュニケーションや私信などのpersonal writingあるいは創作的なcreative writingの場合には、それがかえってコミュニケーションの活性化につながることもなるかも知れない。しかし、目の前にいない相手に向かってビジネス・レターやレポートなどを書く場合に、本稿で分析したサンプルに見られたようなBE動詞多用文が日本人以外の読み手に「未熟で分かりにくい文章」であるという印象を与える危険性があるのなら、学生にそうした危険性を事前に認識させ、回避させるような英作文指導が必要となろう。本稿では“descriptive”な作文課題について41人のサンプルを分析したにすぎないが、BE動詞の多用は日本人が書いたビジネス・レターや論文にもしばしば見られるように思われるので、今後さらに分析対象のproseの種類をひろげていきたいと考えている。

### (参考文献)

- (1)Polster(1995年、数研出版)に特に顕著である。
- (2)竹蓋幸生、1982、「日本人英語の科学」研究社出版、p136
- (3)Selinker, L. 1992. *Rediscovering Interlanguage*, Longmanなど。
- (4)Hinds, J. 1985. *Reader versus Writer Responsibility: A New Typology. Writing Across Languages*. Addison-Wesley Publishing Companyなど。
- (5)天満美智子、1990、「英語学習が日本語を変えていく」、英語教育、大修館書店
- (6)奥津敬一郎、1980、動詞文型の比較、「日英語比較講座」、大修館書店。第2巻、p65
- (7)大津栄一郎、1993、「英語の感覚(下)」、岩波書店。p7
- (8)池上嘉彦、1981、「「する」と「なる」の言語学」、大修館書店
- (9)安藤貞雄、1986、「英語の論理・日本語の論理」大修館書店。p258 p259
- (10)國廣哲彌、1974、日英語表現体系の比較、「言語生活」、筑摩書店
- (11)池上嘉彦、1982、表現構造の比較、「日英語比較講座」、大修館書店。第4巻、p101
- (12)Seidensticker, E. G., 安西徹雄、1983、「日本文の翻訳」大修館書店。p43
- (13)Hinds, J., 西光義弘、1986. *Situation vs Person Focus*, くろしお出版、p37
- (14)池上嘉彦、1981, *ibid.* p70
- (15)King, L. S., (日野原重明監訳), 1981, 「なぜ明快に書けないか」(Why Not Say It Clearly: A Guide to Scientific Writing), メディカル・サイエンス・インターナショナル, p28
- (16)Lanham, Richard A. 1987, *Revising Prose*, MACMILLAN, p1
- (17)綿貫陽、淀縄光洋、1994, Petersen, M. 「教師のためのロイヤル英文法」, 旺文社, p10
- (18)King, L. S., 1981 *ibid.* p28
- (19)Lanham, Richard A. 1987, *ibid.* p3
- (20)Williams, J. M. 1989, *Style*. Scott, Foresman and Company, p17
- (21)安藤貞雄、1983、「英語教師の文法研究」、大修館書店。p10
- (22)Fruehling, R. T., Oldham, N. B., 1988. *Write to the Point*, McGraw Hill, p54
- (23)Dernbach, J. C., Singleton, R. V., Wharton, C. H., Ruhtenberg, J. M., 1994  
A Practical Guide to Legal Writing and Legal Method. Rothman, p180.
- (24)Strunk Jr, W., White, E. B. 1979. *The Elements of Style*, MACMILLAN, p18.
- (25)King, L. S. 1981. *ibid.* p28
- (26)Strunck Jr, W., White, E. B. 1979. *ibid.* p17
- (27)King, L. S. 1981. *ibid.* p28
- (28)巻下吉夫、1984、「日本語から見た英語表現---英語述部の意味的考察を中心として」研究社出版、p7-p9